

ルイジアナ州における墓標景観

中 川 正

I はじめに	III-4 自然石
II 研究方法	III-5 クロス
III 墓標景観要素	III-6 像
III-1 無墓標の墓	III-7 小祠
III-2 頭標と足標	III-8 秘密結社の墓標
III-3 木製墓標	IV 結び

I はじめに

墓地研究者にとって、墓標 (gravemarker) は中心的な研究対象である。建築史学者は、墓石を建築史の流れの中で分析し¹⁾、また文学者は墓碑の歴史的 analysis を行っている²⁾。社会学者は、コミュニティの経済的な差異が、いかに墓石の大きさに反映しているかを調査している³⁾。歴史考古学者も、墓碑に刻印されたさまざまなシンボルの出現時期の調査によって、過去の流行とそれにもなう人々の意識の変化を復元しようと試みている⁴⁾。

地理学的分野において、墓標は墓地景観を構成する重要な要素の一つとして、その年代的变化⁵⁾や文化集団による差異⁶⁾の分析が行われてきた。しかし、初期の文化地理学的研究は、墓標景観から解釈可能な事項を列挙し、その若干の事例を紹介するものであったため、研究方法は一貫せず、不徹底なものであった。たとえば、Francaviglia⁷⁾は、オレゴン州、ミネソタ州、ウィスコンシン州のいくつかの郊外墓地における墓石様式の変化を定量的に提示することによって、合衆国における墓石景観の推移を一般化しようとしたが、文化地理学者の Jeane⁸⁾から厳しい方法論的な批判を受けた。Francaviglia の墓標研究に関する Jeane の批判を要約すると、(1)不十分なデータで一般化を行なっている、(2)郊外の墓地のみを対象とし、農村墓地を無視している、(3)墓標とその他のいくつかの景観要素のみで墓地景観を代表させることはできない、(4)墓標のない墓を無視している、(5)墓石のスタイルのみに視点を置き、墓地のタイプに対する検討に欠けるというものである。Jeane の指摘の中で、方法論的に最も重要なものは、墓地景観の研究にはタイプ (型) とスタイル (様式) の区別が不可欠であるということであろう。

家屋研究において発展させられたタイプとスタイルの概念は、Newton⁹⁾によって次のように要約されている。家屋のタイプは、文化集団に伝統的に受け継がれている形態的規範であり、空間的に差異を示すが、時間的には比較的永続性を持つ。家屋タイプの事例として、合衆国の台地南部に分布するペンタイプ、中西部を中心に各地に分布するアイハウス、フランスルイジアナに分布するアカディ

アンタイプなどがある。これに対して、スタイルは専門家によって考案された流行であり、文化集団によって受容の程度に差異があることはあっても、基本的には空間的な差異よりも時間的な変化を顕著に現す景観要素である。家屋建築におけるスタイルの事例としては、合衆国において18世紀に流行したジョージアンスタイル、19世紀前半から半ばにかけてのグリークリバイバルスタイル、19世紀後半のビクトリアスタイル、20世紀前半のバンガロースタイルなどがある。伝統的な一般家屋の大多数は、基本的にはその文化集団のタイプの家屋を建築し、そのポーチや窓などに当時流行のスタイルの装飾を加えている。したがって、文化景観の分析のときに、この両者の区別があいまいになると、ポーチの装飾として用いられているスタイルを文化集団特有なものとして誤解したり、ある文化集団に固有のタイプをある時代の流行と誤解したりすることがある。文化地理学は、基本的には時間的な変化よりも空間的な差異を示す家屋のタイプをその分析の中心として成果をあげてきた。

これらの概念を墓地景観に適用すれば、タイプは文化集団に特有の墓地の規模、植生、埋葬形態、フェンス、墓上構造物、装飾品、墓標などの複合的パターンを意味し、スタイルは全国的にみられる景観の変化、特に墓標の様式の変化を意味するであろう。Jeaneは、Francavigliaの研究が、墓標のスタイルに焦点をあてているために、文化地理学の中心であるべき墓地タイプの視点がなござりにされていると批判したのであった。

1980年代になると、墓地タイプの文脈の中で、墓標を各文化集団との関連性で考察する地理学的研究が現れるようになった。Jordan¹⁰⁾は、テキサス州における1,000以上の墓地観察に基づいて、アングロサクソン系、メキシコ系、ドイツ系の墓地タイプの特徴を記述する際に、墓標およびそこに刻印された墓碑の分析も行なった。また、Jeane¹¹⁾も、台地南部における墓地タイプの墓標の特徴の記述を行なった。しかし、いずれの研究も、文化集団と墓標形態の関連性の定性的記述を越えるものではなく、系統的、かつ定量的な分析に欠けていた。

筆者は、従来の研究の欠点を補うために、墓地景観分析の方法論を提示し¹²⁾、系統的かつ定量的にルイジアナ州の墓地タイプの設定を行い¹³⁾、かつそれぞれの文化集団における墓上構造物と装飾品¹⁴⁾、および墓地植生の分析¹⁵⁾を行ってきた。本稿は、その一連の研究の方法と視点を、墓標景観の分析に応用し、ルイジアナ州の墓地タイプにおける墓標景観の実態を解明するものである。

ルイジアナは、州の北部と南部による際だった民族構成のゆえに、文化研究者に注目されてきた。北ルイジアナに居住する大多数の人々は、スコットランド系アイルランド人の血が混じったアングロサクソン系民族であり、彼らのほとんどは、保守的な福音派的プロテスタントである。これに対して、南ルイジアナの住民の大多数はフランス系であり、かつローマカトリックの信者である。これに加えて、ルイジアナ州の人口の30%を占める黒人は、主にミシシッピ川やレッドリバー川流域のプランテーション地域や、ニューオーリンズやバトンルージュなどの都市に居住している。墓標景観は、この南北の地域、カトリック・プロテスタントの宗教、黒人・白人の人種、都市・農村の地域を視点として、集団が形成する墓地タイプの文脈において分析される。

Ⅱ 研究方法

ルイジアナ州の墓標に関するデータは、筆者が1985年12月から1986年5月にかけて行なったルイジアナ州全域にわたる236のサンプル墓地の現地調査から得られたものである。このサンプルの抽出は、ルイジアナ州全域をおおい、カトリックとプロテスタント墓地、白人と黒人墓地、都市と農村墓地それぞれを含み、かつ主観的な偏りを最小限にするために、次のような基準によって行なわれた。まず、ルイジアナ州をおおう62,500分の1各地形図から、その中心点に最も近い場所に存在する墓地が、それぞれ1つずつ抽出された。ルイジアナ州よりも他州にかかる面積の方が大きい地形図は、サンプルを抽出する地形図から除外された。それに加えて、分析の対象となるためには、その墓地が1930年以前に設立され、かつ調査当時においても使用されているものでなければならぬこととし、最も地図の中心点に近い墓地がこの2条件を満たさない場合は、次に中心点に近い墓地を抽出することにした。この抽出方法で、まず178の墓地が選定された。

しかし、この方法では、サンプルに人口の多い都市や、地域に優勢な宗派の墓地が含まれていない場合が多い¹⁶⁾。この欠点を補うために、これらの抽出墓地に加えて、それぞれの郡庁所在地 (parish seat) から、1つずつ墓地が抽出された。2つ以上の墓地が郡庁所在地に存在する場合には、その都市の性格を代表させると思われる墓地を、その起源、人種、宗派などの観点から判断して選択した。この方法は、幾分恣意的であるが、合衆国南部の郡庁所在地には、必ずといってよいほど郡の中心的な墓地が設計されているために、代表的な墓地の選択は、ほとんど問題なく行なわれた。この第2のサンプリングによって58の墓地が加えられ、計236のサンプル墓地が決定した。

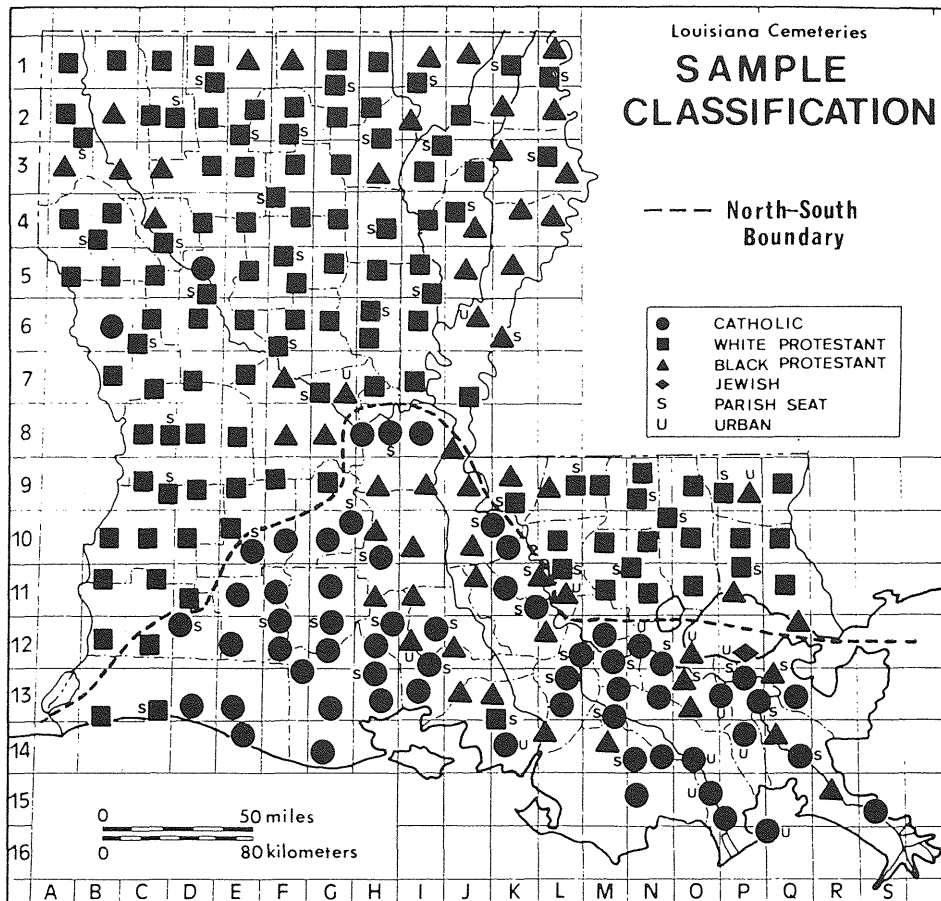
データの収集は、各々の墓地の観察、測定、聞き取り、写真撮影などの野外調査によって行なわれた。調査票には、墓地の所有者、人種、宗派などの社会文化的属性に加えて、墓標形態をも含む景観要素が記入された。墓標形態要素としては、墓標の有無、墓標の位置、材質、クロスの有無、像の有無、墓標の形状などが調査項目に加えられた。

これらのデータを地図化するうえで、それぞれの墓地を形成する社会集団の属性を地図上に示した(第1図)。都市に立地する墓地は“S”(郡庁所在地)や“U”(それ以外の人口1,000人以上の都市)の記号で表され、カトリック墓地(すべて白人が大多数を占める)は円形、白人がマジョリティを占めるプロテスタント墓地は正方形、黒人のみによって構成されるプロテスタント墓地は三角形、そしてユダヤ人墓地はひし形を用いて表現された。墓標景観要素はこの地図上に記され、集団との関連性において分析された。

Ⅲ 墓標景観要素

Ⅲ-1 無墓標の墓

墓標は伝統的に墓地研究者の関心の的とされてきたが、墓地タイプの文脈の中で景観を分析するためには、墓標を持たない墓の存在を認識する必要がある¹⁷⁾。調査を行なったサンプル墓地の中では、無墓標の墓は黒人墓地に数多く現れた(第2図)。すべての白人墓地では、墓標を持つ墓が卓越して

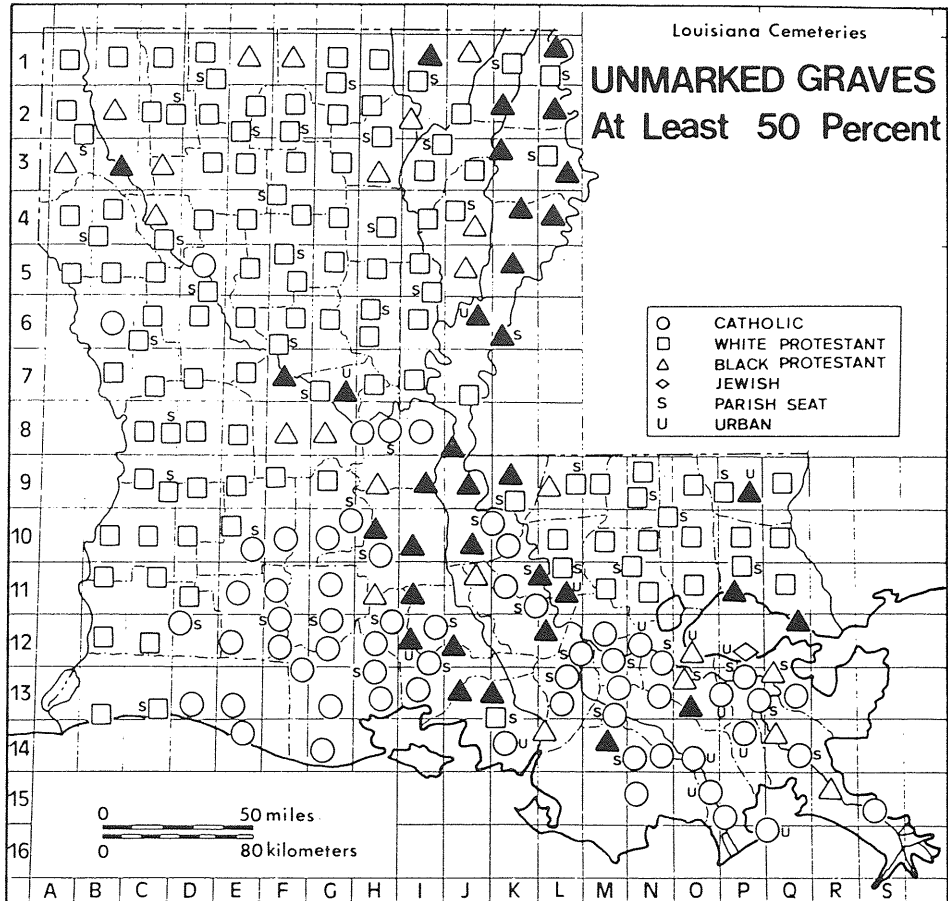


第1図 サンプル墓地の分布

いるが、黒人墓地の58%では無墓標の墓の数が墓標を持つ墓の数を上回っている。2つの黒人墓地（地図上の5K,91）には、墓標が全く存在しない。墓標をほとんどたない黒人墓地は、無秩序な様相を呈する（写真1）。黒人プロテスタント墓地の中には、足を東に向けた墓の配置がしばしばみられるが、それ以外の規則的な配置パターンはみられない。新しい墓の存在は、土盛りとプラスチック製の造花によって誰の目にも容易に確認されるが、埋葬後数年を経た墓は、棺を納める木製の容器が押しつぶされた後の窪みとなつてのみ認められる。

黒人墓地における無墓標墓の卓越は、黒人の低い経済的状態に関連しているものと思われる。1979年における白人1人あたりの所得は、8,253ドルであるのに対し、黒人1人あたりの所得は3,628ドルと、白人の44%にすぎない。黒人が墓石購入を望んでも、経済的状態がそれを許さない場合があると思われる。

しかし同時に、黒人が墓標を望む度合いが白人よりも低い可能性も見過ごすことはできない。彼らがもし墓標を本当に欲するならば、木製墓標や、自然石などの安価な墓標をおくことも可能であろう。



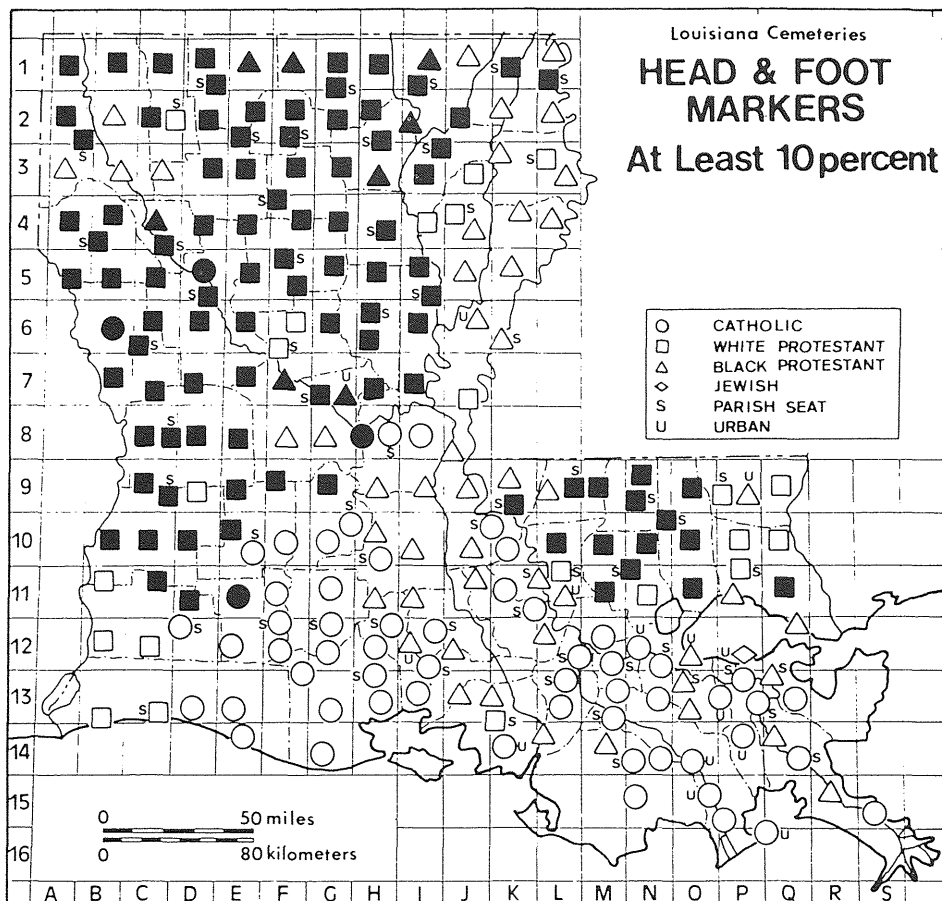
第2図 無墓標の墓が卓越する墓地の分布

黒人墓地の手入れがそれほど頻繁に行なわれていないことから、埋葬地点を明示しなければならないという意識の低さがうかがえる。黒人墓地においては、埋葬のかなり後になっても、塚の上の造花がそのまま放置されている場合がある。墓標が存在しないために、新しい埋葬がすでに遺体が埋葬されている地点に行なわれることもしばしばあるといわれている。

墓地タイプの文脈の中で墓標を理解するときには、まずこの墓標の存在に対する集団の価値を問題にしなければならないだろう。存在する墓標のみからアメリカ文化の理解を試みるときには、黒人の墓の少なからぬ部分を見落としてしまうことを知らなければならない。

III-2 頭標と足標

墓の中には、埋葬体の頭に相当する地点ばかりではなく、足にあたる部分にも墓標を置くものがある。一般的に、頭標は足標よりも大きく、より洗練されたものになっている。頭標と足標には、商業的な墓石ばかりではなく、木製墓標（写真2）や、鉄製の墓標、自然石（写真3）などがある。商業



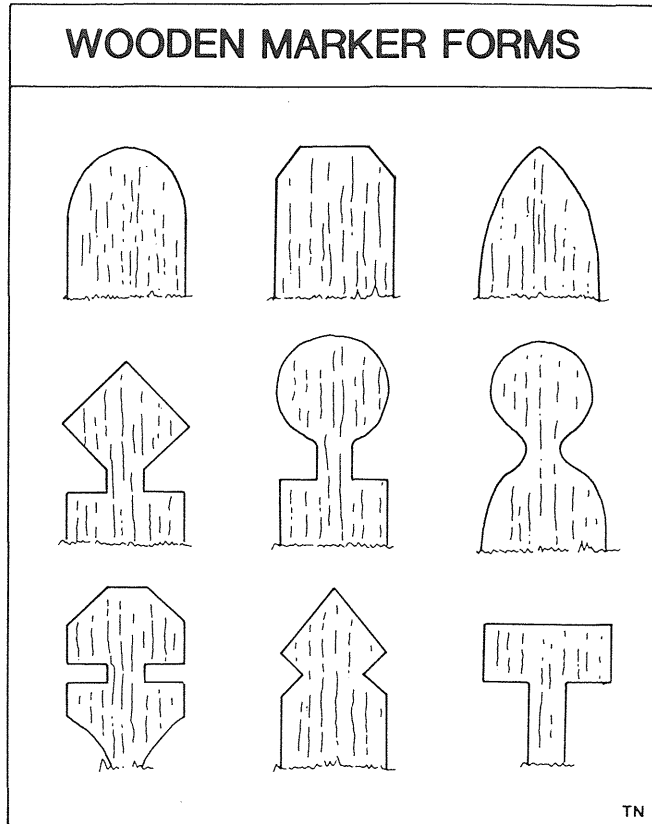
第3図 頭標と足標を持つ墓が10%以上を占める墓地の分布

的な頭標は、少なくとも故人の名前と誕生年と享年を刻印しているのに対して、足標は名前のイニシャルのみを刻んでいる。

頭標と足標両者を持つ墓は、頭標のみを用いる墓ほど一般的ではない。両者を用いている墓が半数以上を占める墓地は236のサンプル墓地の中でわずかに16墓地のみである。しかし、10%以上の墓が頭標と足標を持つ墓地の分布を地図化すると、集団による差異が顕著に現れる（第3図）。

まず、南北ルイジアナの差異が明瞭である。10%以上の墓が頭標と足標を持つ墓地の割合は北ルイジアナでは69%であるのに対して、南ルイジアナでは2%にすぎない。この差異は、南ルイジアナにおいて大多数の墓が地上埋葬やコンクリート棺埋葬を行なっていることに起因する。地上埋葬墓やコンクリート棺は、それのみで埋葬地全体を半永久的に明示する働きをするために、南ルイジアナの人々は、余分な資金を用いてまで非機能的な足標を設置しようとしないのであろう。

白人墓地と黒人墓地の差異も顕著である。10%以上の墓が頭標と足標を持つ墓地の割合は、白人墓地では55%であるのに対して、黒人墓地では12%にすぎない。黒人の墓には墓標を持たないものが多



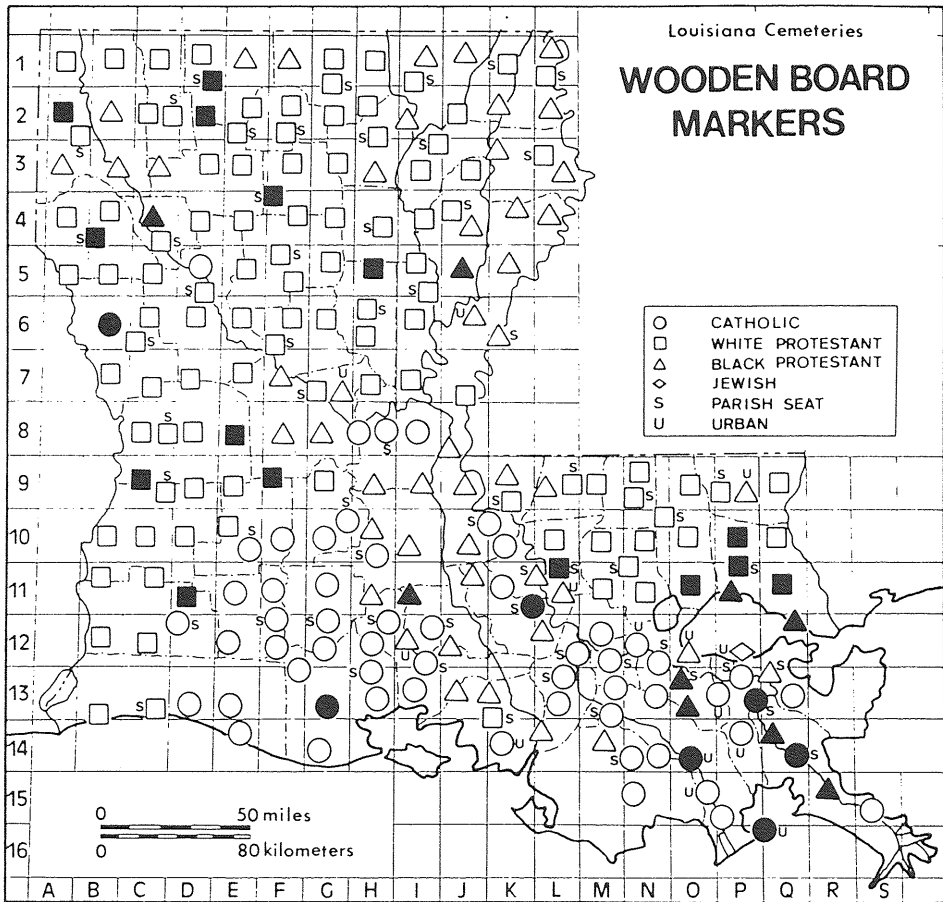
第4図 木製墓標形態

いことが、この数字に反映しているものと思われる。黒人が白人と比べて埋葬地点を明示しようとする傾向が小さいこと、および墓標を購入する経済的なゆとりが小さいことが、黒人墓地の足標の少なさに現れているのであろう。

Ⅲ-3 木製墓標

農村墓地には、商業的な墓石以外にも、さまざまな墓標形態が存在する。たとえば、北ルイジアナの白人プロテスタント墓地であるオールド・スパルタ墓地(3D)では、自然石、木製墓標、鉄製の機械部品、パイプ、鉄製墓標、そしてシーダーの木などが墓標として用いられている。黒人墓地においては、自家製のコンクリート板がしばしば用いられている。南ルイジアナでは、カトリック墓地を中心に、鉄製・コンクリート製・木製のクロスが分布している。これらの景観要素のうち、本節では木製の墓標を分析する。木製のクロスに関してはクロスの子の墓標の節で扱うために、ここでは対象外とする。

木製の墓標は、合衆国南部の農村墓地にしばしばみられる非商業的の墓標である。材質としてはマツ、スギ、ヒノキなどが頻繁に用いられている。最も一般的な墓標は、頭に丸みを帯びたタブレット形の



第5図 木製墓標の分布

板であり、この形態は手製のコンクリートの墓石にも商業用の墓石にもみられるものである(第4図、写真2)。木製墓標独自の形態としては、中央がくびれ、上方がダイヤモンド形や円形のものなどが代表的である。この形態の理由としてJeaneは、人間の形を似せたのではないかとする1人の黒人の意見を紹介している¹⁸⁾が、それは推測の域をでるものではなく、この形態の起源に関してはまだ明らかにされてはいない。この中央がくびれた形態以外に、T字形の木製墓標も存在する。

現在の木製墓標の分布は希で、サンプル墓地の13%に相当する31墓地にのみ存在する。Jeane¹⁹⁾によると、台地南部において木製墓標は、入植期から1835年頃まで最も一般的な墓標形態であり、商業的墓標が卓越してきた後も1930年代頃まで用いられ続けた。1940年代以降は、ほとんど使用されなくなった。筆者の観察によっても、現在残っている木製墓標の大多数は、1930年代以前に設置されたものである。

木製墓標は、南北ルイジアナの両者に、カトリックにもプロテスタントにも、白人墓地にも黒人墓地にも、かつ都市墓地にも農村墓地にも分布している(第5図)。木製墓標は台地南部の農村墓地に

特徴的だとする Jeane の意見²⁰⁾は、この分布からは支持され得ない。木製墓標は、専門家が考案したスタイルではないことは確かであるが、台地南部独自の墓地タイプ要素というよりは、フランス系ルイジアナをも含む合衆国の広い地域にわたる景観要素である可能性が高い。木製墓標と文化集団との関連性を解明するためには、単に材質ばかりではなく、形態の分布を検討する必要があるものと思われる。

Ⅲ-4 自然石

もう一つの代表的な非商業的墓標は、木製墓標よりも永続性のある自然石である。自然石とはいえ、まったく細工をほどこさない石は少なく、だまかに削られている場合が大多数である。

ルイジアナ州において顕著な自然石墓標の材質に、アイロン・ロックと呼ばれる鉄分を含む赤褐色の砂石がある（写真3）。McCarter と Kniffen による北ルイジアナのリンカーン郡における調査によると、19世紀においてアイロン・ロックは墓石ばかりではなく、家の台石、煙突、井戸の囲い、石段、製糖用のひき臼などに使用されていたが、20世紀になってほとんど用いられなくなった²¹⁾。

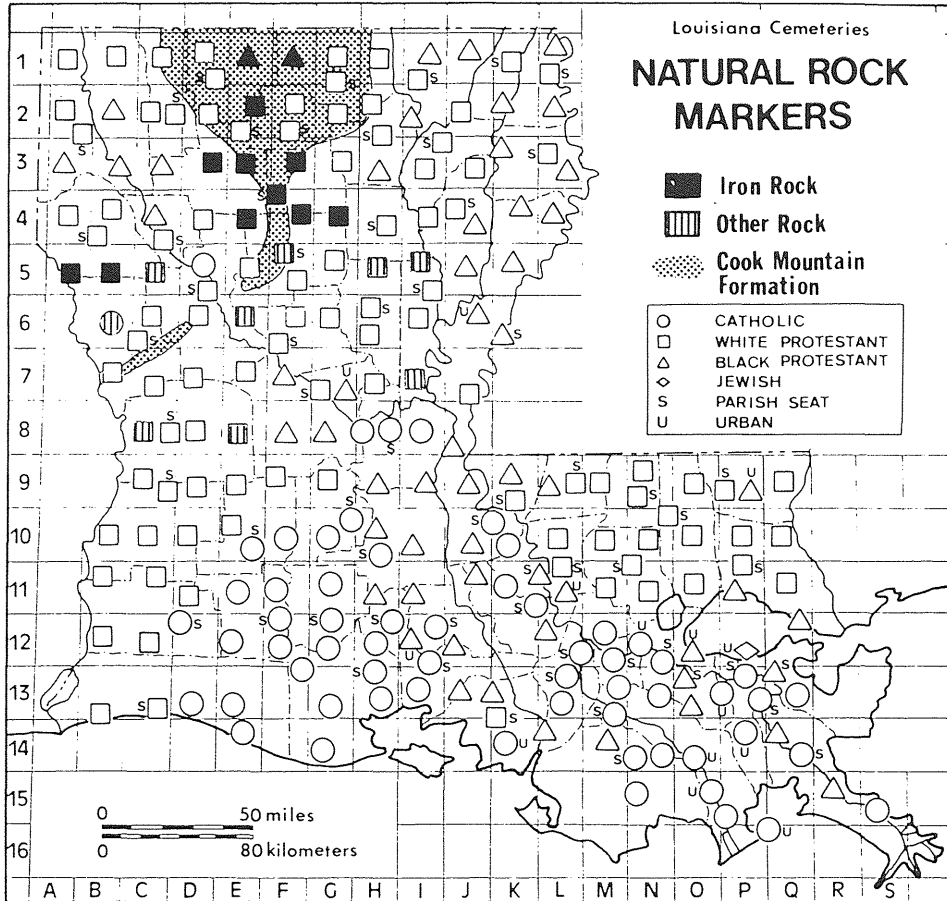
自然石墓標の存在する墓地は21墓地にすぎないが、そのすべては北ルイジアナに集中している（第6図）。この分布には、自然石入手の容易さが関連しているように思われる。自然石墓標の存在する21墓地のうち、20墓地は丘陵地に存在し、特にアイロン・ロックの墓標は、アイロン・ロックの源であるクック造山帯上や付近に分布している。南ルイジアナに自然石が存在しない理由は、おそらくその入手が困難であったからであろう。

この自然石墓標を含む墓地は、すべて北ルイジアナ墓地であり、1例を除いてはすべてプロテスタント墓地であるが、自然石墓標が文化的アイデンティティの表現であると断定することには慎重でなければならない。Newton は²²⁾、文化集団が独自のタイプの民家を建築する際に、その地域に入手できる材料を用いる傾向を持つことを指摘している。したがって、異なった材質で作られた民家でも同じタイプの家屋とみなされる場合が多いとしている。ルイジアナにおいては、自然石を入手し易い文化集団が、北ルイジアナのプロテスタントに対応しているため、結果としてその集団に片寄った自然石墓標の分布が現れたとみなされる。

Ⅳ-5 クロス

カトリックとプロテスタントは、クロスの墓標に異なったシンボリックの意味を賦与している。カトリックはクロスを墓標として好んで用いるが（写真4）、プロテスタントはそれをカトリック的なシンボルとみなし、避ける傾向を持つ²³⁾。合衆国の台地南部のプロテスタントの中には、クロスの墓標としての使用をタブー視するものもある²⁴⁾。この傾向は、ルイジアナにおいても顕著である（第7図）。10%以上の墓がクロスの墓標を持つ墓地の割合は、プロテスタントでは10%にすぎないのに対して、カトリックでは90%にも達する。

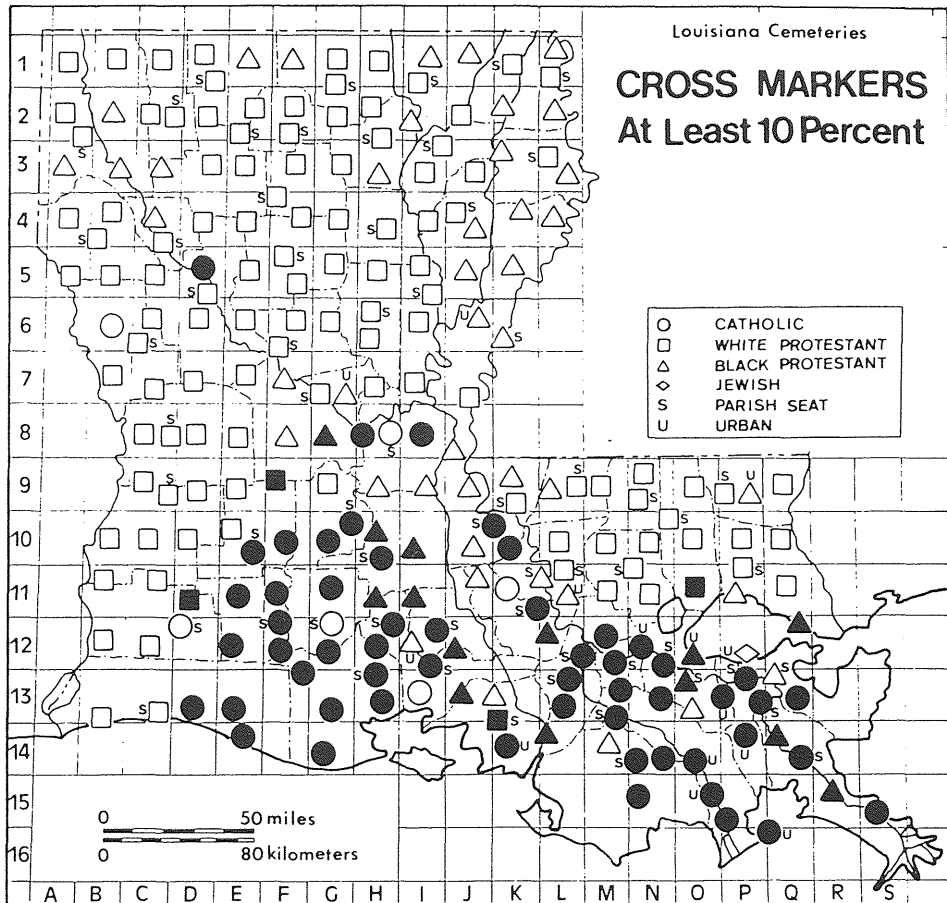
同様に、南北ルイジアナの差異も際だっている。10%以上の墓がクロスの墓標を持つ墓地の割合は、北ルイジアナでは4%であるのに対して、南ルイジアナでは76%におよぶ。南ルイジアナにおいては、



第6図 自然石墓標の分布

かなりのプロテスタントがクロス（十字架）の墓標を持っていることが注目される。10%以上の墓がクロスを持つプロテスタント墓地の割合は、北ルイジアナでは3%にすぎないのに対して、南ルイジアナでは44%と半数近くにおよぶ。南ルイジアナにおいて、プロテスタントがクロス（十字架）の墓標に対して持つ抵抗は、北ルイジアナに比べてはるかに小さいことがうかがえる。南ルイジアナのプロテスタントは、地域に優勢なカトリック墓地内の数多くのクロス（十字架）の墓標景観に接していること、および結婚をも含むカトリックとの交流が、クロス（十字架）の比較的高い頻度となって現れているのかもしれない。さらに、南ルイジアナにおける黒人プロテスタントが、比較的低コストで、作成の容易なクロス（十字架）を墓標として選択し安かったとみなすことも可能であろう。

十字架（crucifix）の墓標は、磔（はりつけ）になっているキリスト像をも含むクロス（十字架）の墓標である（写真5）。十字架（crucifix）墓標を含む墓地の分布は、クロス（十字架）の分布と類似し、カトリック墓地の割合が66%と高く、プロテスタント墓地で3%と低い（第8図）。また、北ルイジアナの割合は3%と低く、南ルイジアナでは46%と比較的高くなっている。十字架（crucifix）墓標の分布がクロス（十字架）の分布と最も異なる点は、黒人プロテスタント

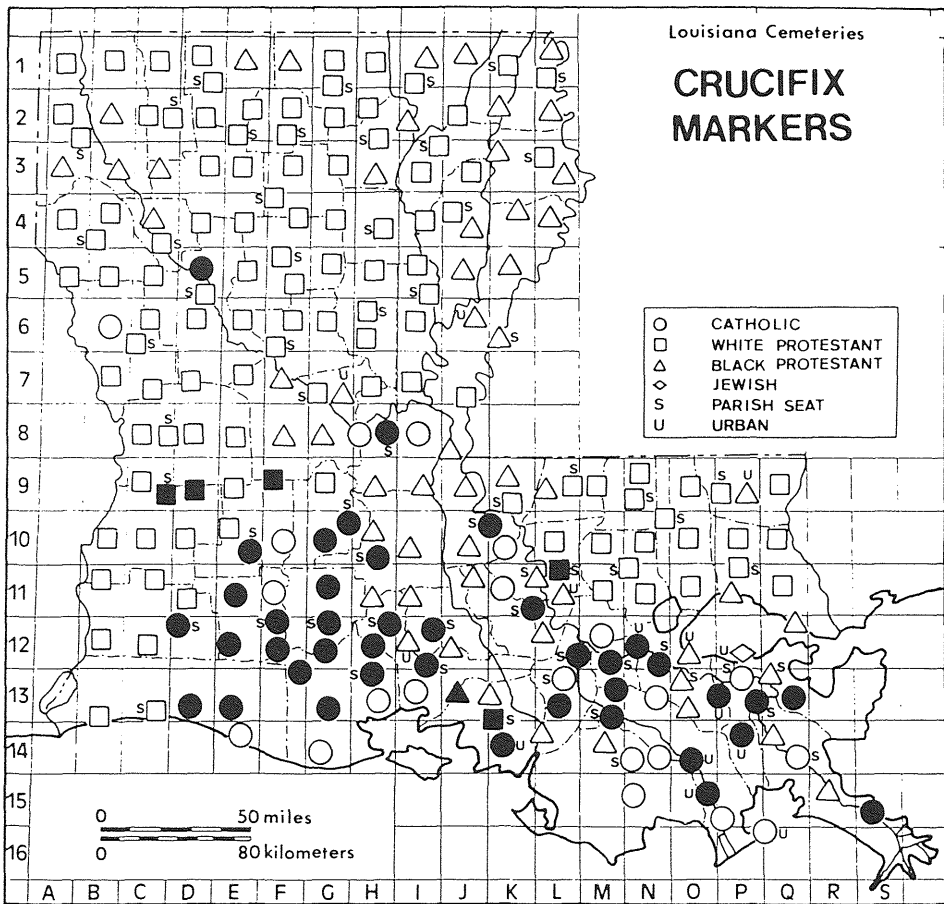


第7図 クロスを持つ墓が10%以上を占める墓地の分布

墓地に十字架墓標がほとんどなく、サンプル墓地の中では、わずかに南ルイジアナのセント・メリー郡(13 J)に1例存在するのみである。十字架墓標はクロスに比べて洗練され、高価であるために、黒人プロテスタントによって購入が容易な墓標とはみなされなかったものと考えられる。十字架墓標を含む白人プロテスタント墓地は、南ルイジアナの中や南北の境界帯に分布していることから、プロテスタントにおける十字架の使用は、南ルイジアナのカトリックとの文化的接触に関連しているとみなされよう。

十字架墓標は、クロス墓標に比べて数が少ない。34%のカトリック墓地が十字架墓標を持たず、十字架墓標を持つ46墓地のうち、29墓地(65%)においてその数は5つ以下であり、14墓地(30%)が1つしか持たない。唯一の例外というべきアワ・レディ・オヴ・プロムプト・サッカー墓地(13P)には76の十字架墓標があるが、その大多数は新しい地上埋葬墓に付けられているものである。

十字架墓標の使用は伝統的なものではあるが、ルイジアナであまり普及せず、その大多数は1960年以降に設置されたものである。カタログ化された新しい地上埋葬墓の中に、十字架墓標を含むものが



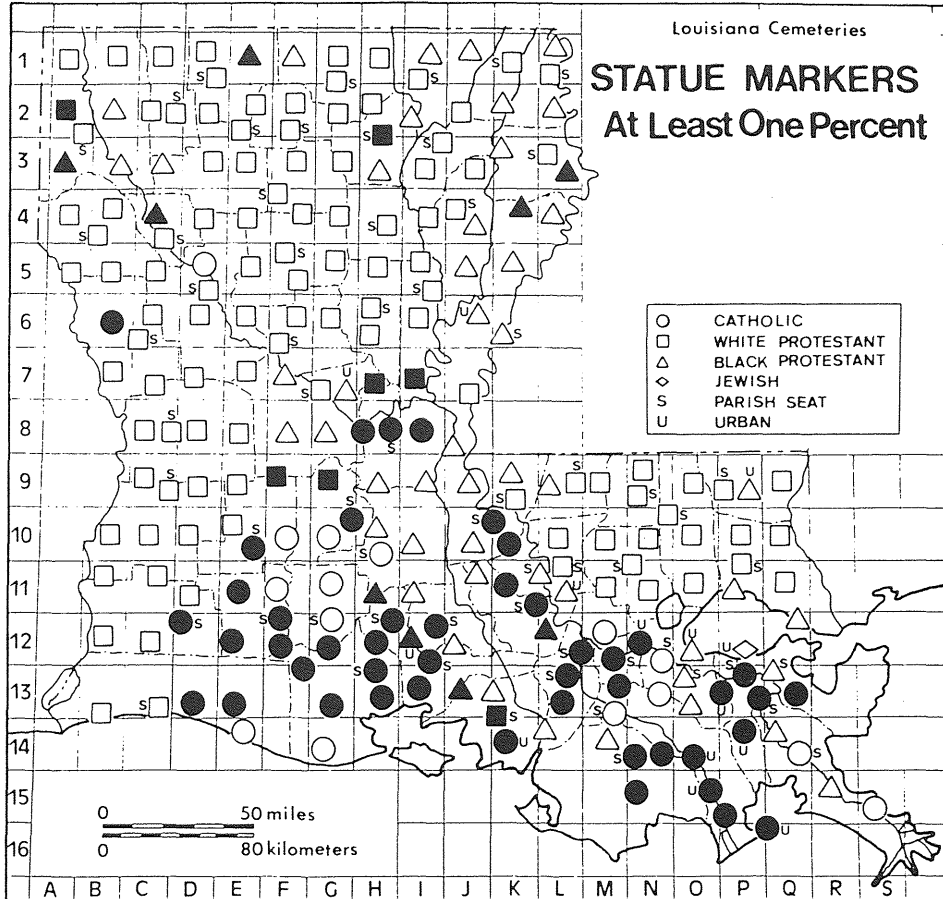
第8図 十字架墓標の分布

現れたために、その頻度が増加している。

Ⅲ-6 像

カトリックはマリヤ、天使、聖人、キリストなどの像を墓標として好む傾向を持つが、プロテスタントはそれらをカトリック的なものとして排除する傾向がある。その傾向は、ルイジアナ州においても顕著に現れている（第9図）。1%以上の墓が像を持つ墓地の割合は、カトリックでは75%であるのに対して、プロテスタントでは10%にすぎない。

像の半数以上を占めるマリヤ像は、カトリック墓地のみならず、南ルイジアナのプロテスタント墓地においでもしばしば利用されている（写真6）。次に頻度の高い墓標は天使の像であり、カトリックはもちろん、少数の白人や黒人プロテスタントにも用いられている（写真7）。キリスト像や聖人像は一部の黒人プロテスタントの例外を除けば、カトリック墓地に限って分布する。これらの分布パターンから、天使像は白人プロテスタントにとっても、カトリック的色彩が薄いものと見なされてい



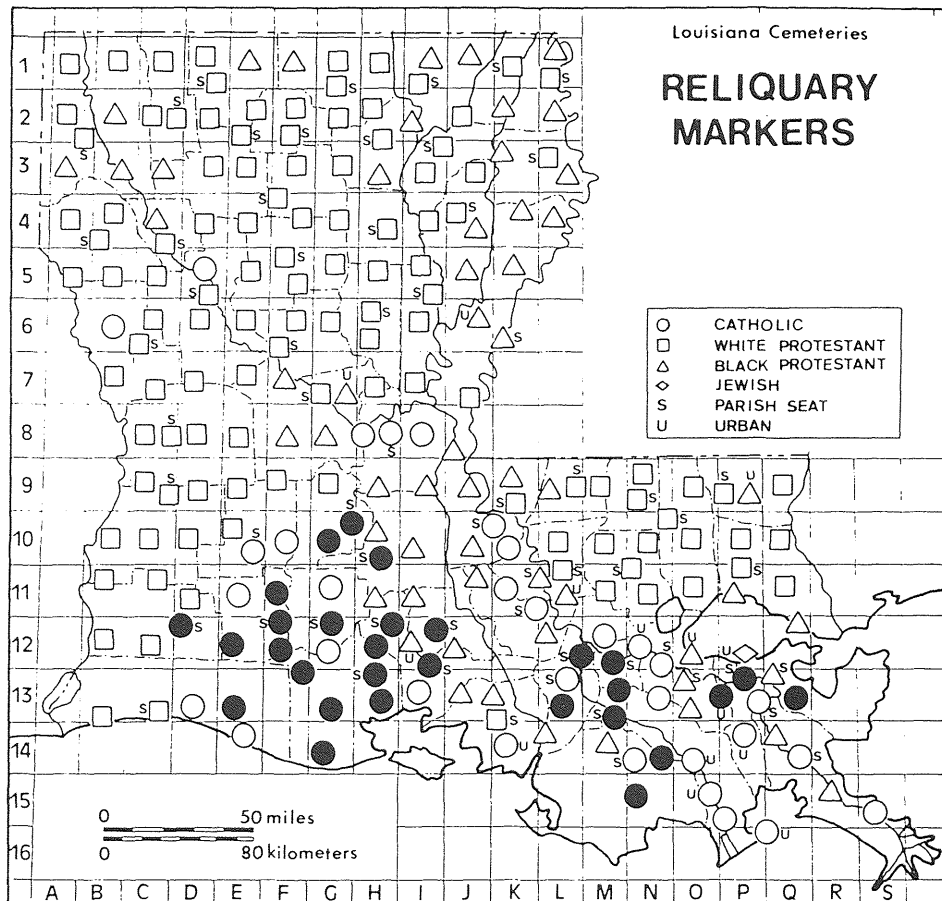
第9図 像を墓標として用いる墓が1%以上を占める墓地の分布

ることがうかがえる。

Ⅲ-7 小祠

カトリックの墓には、希に墓標として小祠(reliquary)を置くものもある。小祠には、四角や丸いコンクリートの構造物や、頭部が屋根形や平形をした木製の箱、クロスの中に祠を埋め込んだものなどさまざまな形態がある(写真8,9,10)。いくつかの小祠はマリヤ像やキリスト像を持つが、プラスチック製の造花を納めるものもある。テキサス州のメキシコ系墓地では、小祠にさまざまな色彩が施されていることが報告されている²⁵⁾が、ルイジアナのサンプル墓地の中の小祠はすべて白く塗られている。

ルイジアナ州においては、小祠はカトリック墓地のみに分布する(第10図)。墓地内における小祠の数は少ないが、カトリック墓地の中で小祠を持つものの割合は50%に達する。小祠は、きわめてカトリック的なアイデンティティを示す墓標とみなされており、南北ルイジアナのプロテスタントの



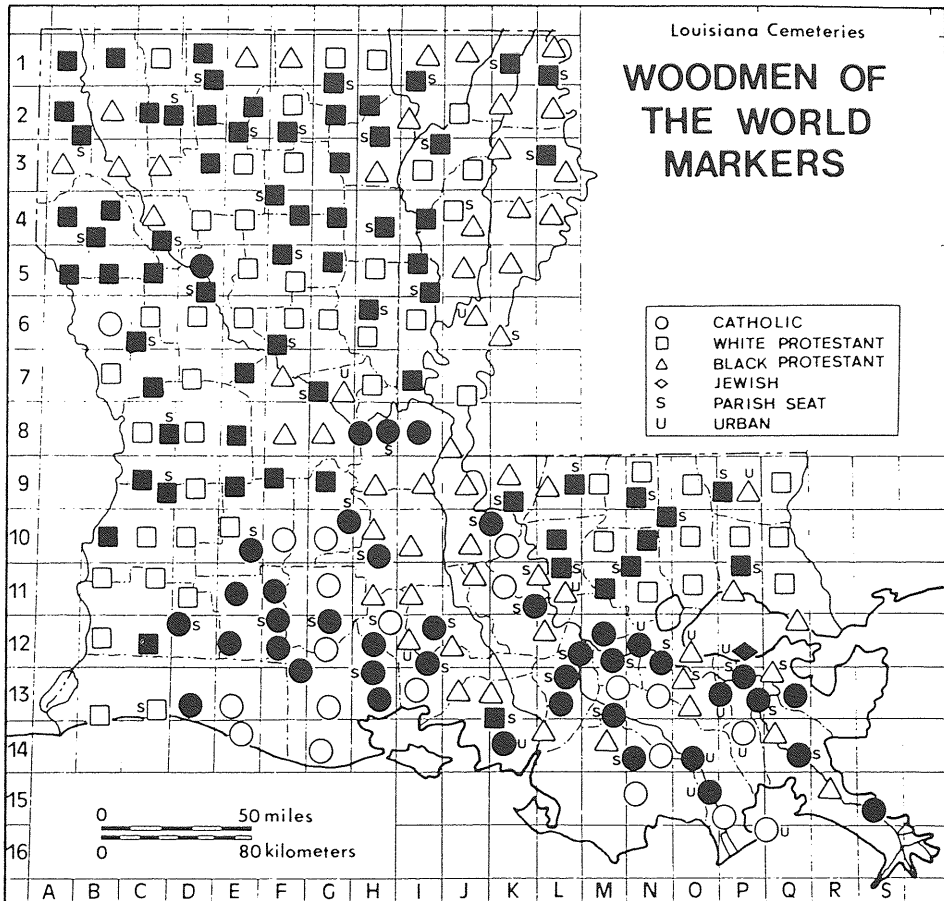
第10図 小祠の分布

人々への聞き取り事例によっても、プロテスタントの人々が小祠をおくことはありえないこととされている。

Ⅲ－8 秘密結社の墓標

合衆国では、会員の相互扶助と共通目的のために結成される秘密結社が、会員に墓標を提供することがある。最も顕著な秘密結社の墓標は、ウッドメン・オヴ・ザ・ワールド（WOW）という生命保険相互扶助組織のものである。典型的なWOWの墓標は、切断された木にWOWのシンボルを付けたものであるが（写真11）、南ルイジアナのカトリック墓地では、十字架を伴ったモニュメントが用いられる場合が多い。

WOWの墓標は、南北ルイジアナのカトリックとプロテスタントに分布しており、この団体の宗派を問わない性格を反映している（第11図）。都市と農村においては、いくらか都市に偏った分布がみられるようであるが、これは主に、都市墓地の規模の大きさを反映したものであり、多くの墓を含む

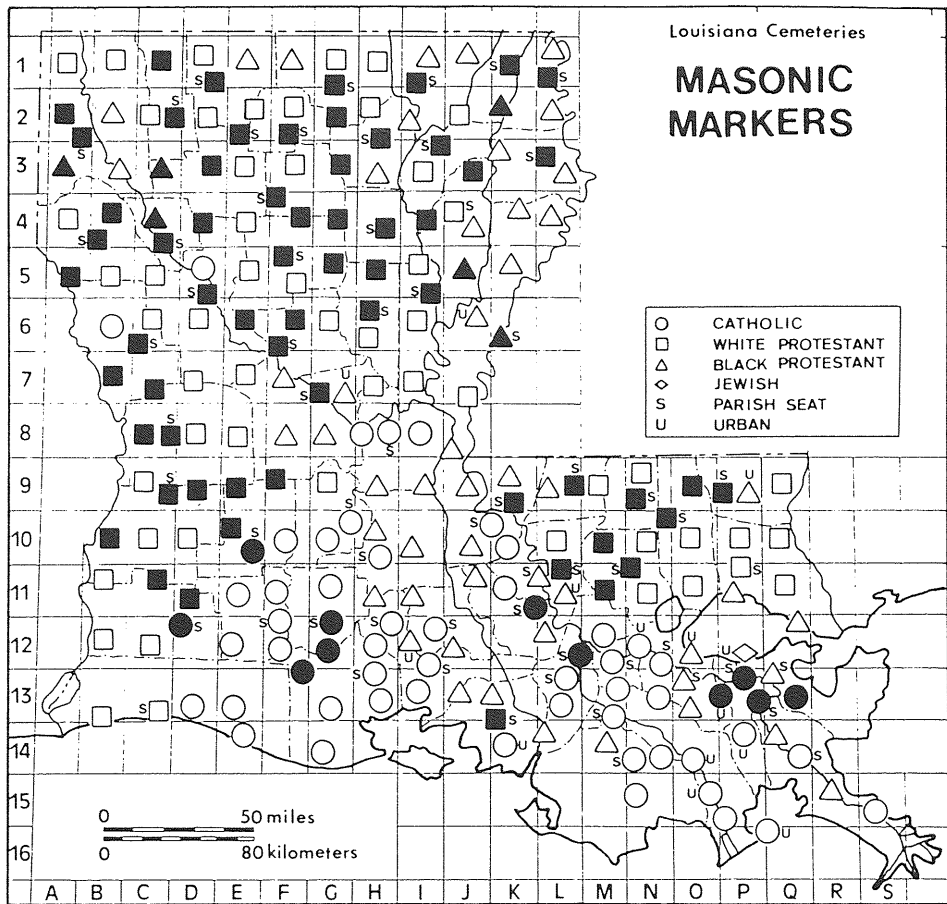


第11図 ウッドメン・オヴ・ザ・ワールド墓標の分布

都市墓地がWOW墓標を含む確立が高くなっている。

WOW墓標の分布は人種間において最も際だった対照を示している。サンプル墓地におけるWOW墓標はすべて白人のものであり、黒人のものは存在しない。この団体は白人も黒人も含むものであるが、黒人の会員がWOWモニュメントを購入する資金の余裕がなかったことがこの分布に現れているのであろう。

フリーメーソンも、墓標にコンパスとGマークをあしらった団体のシンボルを刻む（写真12）。WOW墓標の分布とは異なり、フリーメーソンの墓標は、北ルイジアナの都市の白人プロテスタントに偏っている（第12図）。フリーメーソンがプロテスタントの中で特殊な信仰を共有する人々の集まりであるために、プロテスタント墓地によくみられることは当然であるが、例外的にニューオーリンズ、クラウリー、プラケミン、ドナルドソンヴィルなどの南ルイジアナの都市のカトリック墓地に分布することは興味深い。カトリックへのフリーメーソンの浸透状況に関しては、より詳細な調査が必要であらう。



第12図 フリー・メーソン墓標の分布

IV 結 び

本稿は、墓地研究のの中心的対象とされてきた墓標景観の要素のいくつかを、墓地タイプの文脈の中で分析した。墓地のタイプは住民の文化集団への帰属意識が、景観という形で具現化したものとしてとらえられる。その意味で、単に自然条件や経済条件の差異によって生み出された景観は、厳密な意味での墓地タイプの要素とはみなされ得ず、また、ある文化集団に独自のものではない景観要素も、墓地タイプを構成する本質的な要素とはみなされない。この墓地タイプの視点にたつ分析を通して、本研究はいくつかの新しい発見を導いた。

まず、文化集団との関わりがあるとみなされてきた墓標景観要素の中に、必ずしもそうではないものが存在することが明らかになった。たとえば、木製墓標はJeaneなどによって、台地南部の墓地タイプ要素であることが繰り返し指摘されてきたが、本研究の結果は、木製墓標が北ルイジアナのプロテスタントに限られるものではなく、南ルイジアナ墓地においても、カトリック墓地においても分布する要素であることを示した。木製墓標がいかなる集団のアイデンティティの現れであるかを解明す

るためには、単に材質ではなく、木製墓標の形態の分布を検討する必要がある。

また、自然条件が墓碑景観要素に関わっている例としては、自然石の墓標がある。とくにアイロン・ロックの墓標の分布は、その入手可能地域と密接な関係を持つ。自然石という材料そのものは、必ずしも文化的アイデンティティを表現するものではないために、今後より広い地域にわたる形態の分析が課題になるであろう。

さらに、経済条件が直接反映している事例は、黒人墓地にしばしばみられた。墓標を持たない墓は黒人墓地に顕著であり、また、頭標と足標両者を持つ墓も黒人墓地には少なかった。WOWの秘密結社の墓標が黒人墓地のみにみられなかったことも、黒人の低い経済的状況に関連しているものと思われる。このような無墓標景観は、文化的アイデンティティ以上に経済的条件に関与していると思われるために、黒人墓地タイプの構成要素とみなすことには慎重でなければならない。

墓標景観の集団による差異には、墓標以外の景観要素の差異に関連している場合もあった。たとえば、南ルイジアナにおいて頭標と足標両者の使用頻度が低いことには、地上埋葬やコンクリート棺埋葬が卓越する中であって、足標がほとんど機能をしない状況が関与している。その意味で、頭標と足標両者の使用の分布の差異は、間接的ではあれ、文化的アイデンティティを反映していると思われる。

文化的アイデンティティの差異を最も直接的に示す要素は、クロス、十字架、像、小祠などのカトリックが好む宗教的モニュメントであった。プロテスタントがこれらの墓標を拒否する程度は、要素によって異なり、クロスを用いるプロテスタントは少数ながら存在するが、小祠を用いるプロテスタントの事例は発見されなかった。像に関しても、プロテスタントの態度は種類によって異なり、天使像は比較的受け入れやすいが、マリヤ・聖徒・キリスト像を墓標として用いることに対する抵抗は大きい。

これらのカトリック的な墓標に対するプロテスタントの態度は、北ルイジアナと南ルイジアナでは異なる。北ルイジアナのプロテスタントはこれらの要素を拒否する度合いが強いが、南ルイジアナでは、クロス、十字架、像などのある程度受容している。カトリックが卓越する南ルイジアナにおいて、カトリック的景観に慣れ親しんでいることや、結婚をも含む交流の機会の多さが、カトリック的な要素への抵抗を低くさせたのかもしれない。南ルイジアナのプロテスタント、とくに黒人プロテスタントが北ルイジアナのプロテスタントとは異なった独自の文化的アイデンティティを発展させてきたことは、前稿²⁶⁾においても報告したが、この実態に関してさらに研究を進めていく必要がある。

注 ・ 参 考 文 献

- 1) Christovich, Mary Louise, ed. (1974): *New Orleans Architecture - The Cemeteries -*. Pelican Publishing Company: Gretna, Louisiana.
- 2) George, Dianna Hume, and Nelson, Malcolm A. (1980): Resurrecting the epitaph. *Markers*, 1, 85-95.
- 3) Young, Frank W. (1960): Graveyards and social structure. *Rural Sociology*, 25, 446-450.
- 4) Deetz, James F. and Dethlefsen, Edwin S. (1967): Death head, cherub, urn, and willow. *Natural History*, 76-3, 32-39.
- 5) Price, Larry W. (1966): Some results and implications of a cemetery study. *Professional Geographer*, 18, 201-207.
- 6) Kniffen, Fred B. (1967): Necrogeography in the United States. *Geographical Review*, 57, 426-427.

- 7) Francaviglia, Richard V. (1971): The cemetery as an evolving cultural landscape. *Annals of the Association of American Geographers*, **61**, 501-509.
- 8) Jeane, Donald Gregory (1972): A plea for the end of tombstone-style geography. *Annals of the Association of American Geographers*, **62**, 146-148.
- 9) Newton, Milton B., Jr. (1987): *Louisiana—A Geographical Portrait* —. Geoforensics: Baton Rouge, pp.171-172.
- 10) Jordan, Terry G. (1982): *Texas Graveyards — A Cultural Legacy* —. Univ. of Texas Press: Austin.
- 11) Jeane, Gregory (1987) : Rural Southern gravestones—sacred artifacts in the Upland South folk cemetery—. *Markers*, **4**, 55-84.
- 12) 中川 正(1989) : 還元主義的文化景観解釈法. 人文地理学研究, **13**, 111-128.
- 13) Nakagawa, Tadashi (1990): Louisiana cemeteries as cultural artifacts. *Geographical Review of Japan (Ser. B)*, **63**, 139-155.
- 14) 中川 正(1990) : ルイジアナ州における墓上構造物と装飾品. 人文地理学研究, **14**, 145-168.
- 15) 中川 正(1991) : ルイジアナにおける墓地植生. 人文地理学研究, **15**, 125-144.
- 16) たとえば, 筆者が悉皆調査を行なったアセンション郡においては, 85%の住民がカトリックであるにもかかわらず, プロテスタントの墓地の数がカトリックの墓地の数の5.6倍になっている. ランダムサンプリングを行なうと, この郡の大多数を占めるカトリックの大墓地をサンプルに含めない可能性が高い. 中川 正(1988) : ルイジアナ州アセンション郡における墓地形態—死の地理学序説—. 人文地理学研究, **12**, p.119.
- 17) 前掲8), p.147.
- 18) 前掲11), p.66.
- 19) 前掲11), p.65.
- 20) 前掲11), p.65.
- 21) McCarter, John, and Kniffen, Fred B. (1953) : Louisiana iron rock. *Economic Geography*, **29**, 299-306.
- 22) 前掲9), p.172.
- 23) Burgess, Frederick (1963) : *English Churchyard Memorials*. Lutter Worth Press: London, p.35.
- 24) 前掲10), pp.50-51.
- 25) 前掲10), p.79.
- 26) 前掲13).

Gravemarkers of Louisiana Cemeteries

Tadashi NAKAGAWA

This study analyzes the gravemarkers of Louisiana in the context of cemetery types. While the style refers to a fashion of a specific period, the type stands for a modal pattern to which the members of a group attempt to match in different degrees of faithfulness. While tombstone styles have attracted many studies of historical archaeology and architecture history, geographers' focus has been upon cemetery types established by different culture groups. Tombstone analysis in the context of cemetery types requires the identification of correlations between tombstone landscape patterns and specific ethnic, religious, and racial groups.

The data of gravemarkers were collected through field survey of the cemeteries sampled from the entire state. From 3,180 cemeteries identified in the topographical quadrangles, 236 were chosen for analysis by means of a stratified sampling. From each fifteen minute map within Louisiana, the cemetery closest to the center of the map was selected. In addition to those cemeteries, one from each parish seat was chosen in order to achieve a balance between urban and rural cemeteries. The gravemarkers landscape traits were mapped and were associated with such attributes as culture area, religion, race, and urban-rural affiliation.

The unmarked graves characterize black cemeteries While all white cemeteries have more

marked than unmarked graves, 58 percent of sample black cemeteries are predominantly unmarked. Unmarked graves in black cemeteries mainly resulted from the low economic status of the blacks. The possibility exist, however, that their desire for the marker is weaker than that of the white.

Some burials have both head and foot markers. The contrast between North and South Louisiana is evident. The majority of North Louisiana cemeteries have at least 10 percent of graves with head and foot markers, whereas only 2 percent of South Louisiana cemeteries have 10 percent or more. As many burials in South Louisiana take place in above-ground or concrete vaults, people do not desire to place the unfunctional foot marker with the extra cost.

Wooden board markers are distributed in both North and South Louisiana, Catholic and Protestant, white and black, and urban and rural cemeteries. This result does not support the report that wooden board markers are characteristically Upland South traits.

Natural rock markers are identified in North Louisiana where the rock is available. One notable kind of natural rock marker is that of iron rock, a dark reddish-brown sandstone. Iron rock markers are also distributed in the proximity to Cook Mountain Formation, which is the most abundant source of the iron rock.

Cross, crucifix, statues, and reliquary markers are predominantly Catholic. While some Protestants in South Louisiana use crosses and angel statues, all reliquary markers are those of Catholics.

Woodmen of the World monuments are distributed both in North and South Louisiana. Although this society has both white and black members, no black cemeteries display Woodmen of the World Markers.

The Order of Masons erects markers with Masonic symbols. Masonic markers are seen mostly in North Louisiana, Protestant, white, and urban cemeteries. Although Catholics usually do not belong to the Masonic society, some exceptions are seen in the cities in South Louisiana.



写真1 墓標がほとんど存在しない黒人墓地

埋葬地点は、土の重みで棺がつぶれ、陥没した穴によって確認できる。

(ワシントン・チャペル墓地，地図上の位置 11；1985年3月)



写真2 タブレット型の木製頭標と足標
(ピース・グローブ墓地，11Q；1985年1月)



写真3 アイロン・ロックの頭標と足標
19世紀末に付近で採掘できる鉄分を含有する砂岩を墓標とする習慣が北ルイジアナのリンカーン郡を中心とする地域で見られた。

(テイラー墓地，3E；1985年3月)



写真4 クロス墓標の卓越するカトリック墓地

ルイジアナのカトリックは、クロスやコンクリート棺を白く塗ることによって聖なる空間を生みだそうとする。

(スイール墓地，13G；1985年4月)



写真5 十字架墓標

十字架(crucifix)は、磔になったキリストをも含むクロスであり、白人のカトリックの墓に用いられることが多い。

(アセンション・カトリック墓地, アセンション郡; 1984年10月)



写真6 マリヤ像の墓標

(セント・フランシス・オヴ・アッシジ墓地, アセンション郡; 1984年9月)



写真7 天使像の墓標

天使像は、カトリック墓地に多くみられるが、希にプロテスタント墓地にも分布する。

(セント・メリー墓地, 10K; 1985年10月)



写真8 マリヤ像を収めた小祠

(セント・バーナード・カトリック墓地, 13Q; 1984年12月)



写真9 地上埋葬墓上の造花を収めた小祠

(セント・ランドリー・カトリック墓地, 10H; 1985年4月)

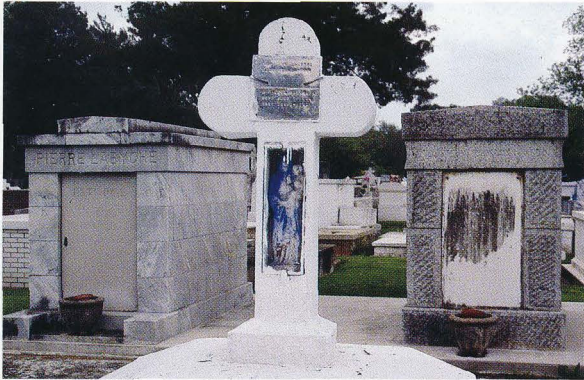


写真10 十字架形の小祠

(セント・ランドリー・カトリック墓地, 10H; 1985年4月)



写真11 秘密結社ウッドメン・オヴ・ザ・ワールドの墓標

(マグノリア墓地, 11L; 1985年11月)



写真12 秘密結社フリー・メイソンの墓標

(マグノリア墓地, 11L; 1985年11月)